



2008年4月16日 グリーンピース・ジャパンが確保した横領鯨肉の箱の品名欄には「ダンボール」と書かれた
配送伝票が貼られていた ©Greenpeace

グリーンピース告発レポート 奪われた鯨肉と信頼 「調査捕鯨母船・日新丸」での 鯨肉横領行為の全貌

GREENPEACE

greenpeace.or.jp

失われた鯨肉と信頼 「調査捕鯨母船・日新丸」での鯨肉横領行為の全貌

はじめに —レポート概要—	5
第1章 情報提供者からの連絡	8
第2章 さらなる証言者との情報の整合	10
第3章 2008年4月15日 日新丸 東京港へ入港	11
第4章 西濃運輸の配送所にて配送伝票を確認	13
第5章 共同船舶株式会社の職員名簿と照合	16
第6章 箱を追って青森県へ	17
第7章 塩漬け鯨肉を発見、証拠を確保	19
第8章 市場での調査における証言	22
第9章 水産庁への問い合わせ	22
第10章 検察庁への告発、第3者による調査、そして信頼の回復を	23
参考資料	
情報提供者とのインタビュー録	24

「捕鯨問題についてでございますが、我が国が行っている調査捕鯨は、国際捕鯨取締条約に従い公海上で実施する合法的な活動であります。捕鯨問題については、捕獲や調査の適否、やり方について、習慣などの違いも背景に異なる考え方がございます。感情的な対立に流されることなく、冷静に科学的議論を行うことが重要であります…。」

参議院本会議 平成20年1月23日

内閣総理大臣 福田康夫

はじめに



2008年4月15日 東京港大井水産ふ頭に入港した捕鯨母船・日新丸
©Greenpeace

2008年4月15日、国際的な非難の中、日本の捕鯨船団が5カ月間に及ぶ南極海への航海を終えて東京港に入港した。この「調査捕鯨」と呼ばれる捕鯨活動は、日本政府が「国際捕鯨取締条約に従い公海上で実施する合法的な活動」とするもの。日本が行う水産関連調査プロジェクトとしては最大規模の事業で、日本市民の税金から年間5億円以上の補助金を投じて過去20年間にわたり合計100億円以上の税金が費やされてきた。

管轄官庁である水産庁や調査主体である財団法人日本鯨類研究所、そして捕鯨船の傭船会社である共同船舶株式会社は、この調査活動が国際的なルールに基づいて行なわれていると主張し続けてきたが、今回のグリーンピース・ジャパンの調査により、その実態が著しく異なることが明らかになった。

ーレポート概要ー

捕鯨船団の中心的な役割を担い、鯨肉の加工船である日新丸の船上において、その乗組員による鯨肉の横領行為が行なわれていたことが判明したのだ。しかも、その横領行為は日新丸船上においては公然の秘密として行なわれており、大規模かつ長年にわたって続いてきた可能性が高い。

グリーンピース・ジャパンでは、今回の鯨肉横領調査の過程において、その横領行為が行なわれた鯨肉を証拠として確保することに成功した。その鯨肉は、共同船舶株式会社の社員である日新丸の船員が、東京港に入港した日新丸から宅配便で自宅に送ったもので、塩漬けされた畝須（うねす）と呼ばれる部位23.5キロ。その鯨肉の市場価値は1箱で11万円から35万円になるとみられる。

また、この箱と同様に日新丸より、共同船舶株式会社の社員12名（全員が「製造手」と呼ばれる仕事に従事する）から最低47箱の荷物が送られていたことが確認できた。これらの箱がすべて今回グリーンピース・ジャパンが発見した鯨肉と同様のものだとすると、合計約1.1トン、市場価値にして約1,400万円（1箱30万円としての計算）にも及ぶ鯨肉が横領されていたことになる。



2008年4月16日 グリーンピース・ジャパンが証拠として確保した横領鯨肉(畝須)23.5キロ
© Greenpeace

調査捕鯨を管轄する水産庁遠洋課に、日新丸の船員が鯨肉を個人的に持ち帰るようなことがあるのかを問い合わせたところ、その可能性はないと明確に否定した。

様々な証言や今回の調査で、このような横領行為は長年にわたり、共同船舶株式会社が黙認する中、慣習的に行なわれているものと同様に断定することができる。また、クジラの捕獲数が倍増した2005年末から2006年の調査捕鯨では、同様の横領行為がさらに大規模に行なわれたとみられる。

国際社会の非難を受けながらも、「合法的な科学調査」と半ば強引に税金を投じながら継続してきた捕鯨において、このような横領行為が行なわれていたことは、国内・国外で大きな問題として取り上げられることとなるだろう。

グリーンピース・ジャパンは東京地方検察庁にこの横領行為を告発するとともに、以下の4つのことを日本政府に求める。

1. 横領行為の全貌を明らかにするための第三者による調査の実施とその情報開示
2. 共同船舶株式会社の捕鯨行為への関与の禁止
3. 財団法人日本鯨類研究所への調査捕鯨に対する許可発行の停止
4. 財団法人日本鯨類研究所への調査捕鯨に対する補助金交付の停止

このレポートでは、今回の調査内容を簡潔に、多くの写真などの証拠を交えて説明していく。なお、東京地方検察庁に提出する証拠としてはこのレポートに加え、情報提供者の名前を除きすべて実名を明らかにした資料を証拠として提出する。

第1章 情報提供者からの連絡

今回のグリーンピース・ジャパンによる鯨肉横領調査は、捕鯨船の内部事情を知るとい人物からの連絡がきっかけだった。その情報提供者によると、以下の4点において「調査捕鯨」に問題があるという指摘。

1. 貴重な部位の鯨肉(特に畝須と呼ばれるヒゲクジラの下あごから腹にかけての縞模様の凹凸部分の肉)を、個人が塩漬けにして大量に持ち帰っている。これは船上では公然の秘密。
2. 日新丸の冷凍能力が追いつかないために、解体後の鯨肉を海洋投棄したことが多々ある。
3. 2005年以降のJARPA II 調査では、大量にクジラを捕る必要があるため、調査として必要とされるランダムなクジラの捕獲を行わない時があった。
4. JARPA II になってから大量にクジラを捕る必要があり、労働環境が悪くなった。

グリーンピース・ジャパンでは、2008年4月の日新丸の帰港にあわせて、特に①の調査を行なうこととし、その調査を開始した。



2008年5月 情報提供者のインタビュー、共同船舶のユニフォームを着て
©Greenpeace

第2章 さらなる証言者との情報の整合

2年前の2006年4月、グリーンピース・ジャパンは日新丸が南極から戻り金沢港に入港した際に、その様子を写真に記録していた。その中に、今回の証言と類似する個人宛の荷物が写っていることを確認し、さらにこの調査の過程で共同船舶株式会社の元社員、そして後に現役の社員の証言なども新たに獲得することができた。これらの情報により、最初の情報提供者の情報の信頼性も確認された。それらの証言を総合すると以下のとおり。

1. 甲板において鯨肉の解体作業に従事する「製造手」と呼ばれるベテラン船員が鯨肉を個人的に持ち帰ることが多い
2. この行為は、公然の秘密として船上では昔から行なわれていて、現在も続いている
3. 特に需要の高い鯨肉を船室に持ち込み、それぞれの船室において塩漬けする
4. 日本帰港が近づくと、塩を払い1箱20キロ以上の鯨肉を箱詰めにする
5. この行為は2006年に大規模に行なわれ、多い人で20箱から30箱送った
6. それ以外の船員や日本鯨類研究所職員は、製造手に依頼し鯨肉をわけてもらうこともある
7. 冷凍せずに、塩漬けのまま西濃運輸の宅配便でそれぞれの自宅などに配送する。2006年には西濃運輸のトラック1台が一杯になった。
8. 塩漬け敵須以外にも、共同船舶株式会社がお得意様あて、そして個人のお土産として鯨肉を船上で配分、入港後配送する
9. 船員向けに直接販売する鯨肉もある
10. これらの箱は入港初日に荷降ろしされる

情報提供者のインタビュー（抜粋）

調査員：具体的にどれ位の人数の方って思われますでしょうか？

情報提供者：日新丸でしたら150人乗ってたら、ほぼ120、130人の規模で皆さんが200～300キロのクジラ肉やらベーコンやらを持ち帰ってますね。生産の頭数にはない肉ですよ。

調査員：つまり、公式に発表されるクジラのトン数とはまた別のものですね？

情報提供者：以外、それ以外ですね。これはずっともう昔からやっているみたいです。

調査員：これは皆さんが知っているというような状況ですか？

情報提供者：そうですね。それぞれが皆知ってますけども、公には言わないですけどね。それぞれが暗黙の了解でやってます。共同船舶の社員もいますけども、見てみないふりしてるみたいなものです。

調査員：例えば他に、日新丸には共同船舶だけではなくて、例えば鯨類研究所の人も乗ってますよね？

情報提供者：はい。たぶん、知ってはいますけども、もう、まともに言うことはないですね。

情報提供者の全インタビュー録は24ページの参考資料を参照

第3章 2008年4月15日 日新丸 東京港へ入港

2008年4月15日の早朝、日新丸は東京港の大井水産ふ頭へ入港した。それまでの情報通り、西濃運輸のトラックが岸壁で荷物の積み込みを待っており、午後1時すぎには、オレンジ色のヘルメットと青い作業服の船員が約20名ほど降りてきて、西濃運輸のトラックの前に並んだ。

その後、日新丸に設置されているクレーンで合計90箱程度の個人の荷物と思われる箱が岸に下ろされ、岸で待っていた船員がそれらの箱をバケツリレーのようにして西濃運輸のトラックに積んだ。この光景は、2006年の金沢港での光景と酷似していた。その後、調査チームは西濃運輸のトラックを陸路で追跡した。



2008年4月15日 東京港大井水産ふ頭に着岸した捕鯨母船・日新丸。岸には船員が集まっているのが見える。手前は海上保安庁の警備船。また岸にはヤマト運輸のクール宅急便のトラックもあり、日新丸から降ろされた“私物”とみられる荷物を受取っていた。

© Greenpeace



2008年4月15日 捕鯨母船・日新丸から降ろされる荷物を西濃運輸のトラックに積み込む船員たち
© Greenpeace

第4章 西濃運輸の配送所にて配送伝票を確認

西濃運輸で運ばれた箱の送り先と送り主を調べるために、トラックの行き先であった大井水産ふ頭に近い西濃運輸配送所において、それぞれの箱につけられていた伝票を確認した。ここで、確認できた伝票は合計33枚、運ばれた荷物は最低93箱に及ぶ。送り主は確実に名前がわかるだけで、合計23名だった。多くの荷物は、品名が「ダンボール」と記載されており、中には「塩物」と記載されているものもあった。「ダンボール」と記載されているものでも、中身がダンボールとは思えないほど重いものがほとんどだった。これらの箱には、明らかに私物であろうギターなども混じっていた。



2008年4月15日 西濃運輸の配送所に輸送された個人宛の荷物
© Greenpeace



2008年4月15日 西濃運輸の配送所でギターなどの私物と混じって詰まれる箱
© Greenpeace



2008年4月15日 日新丸から降ろされた頑丈に包装されている箱が配送所に詰まれる
© Greenpeace



2008年4月15日 この北海道宛の伝票の品名欄には「ダンボール」と書かれ、更に同じ送り先に5箱送られたことを示している
© Greenpeace



2008年4月15日 北海道宛のこの伝票の品名欄には「黒のナイロン 箱」、
送り主に「共同船舶(株) 日新丸 <本人名>」と書かれている
© Greenpeace

第5章 共同船舶株式会社の職員名簿と照合

グリーンピース・ジャパンでは、事前に共同船舶株式会社の数年前の職員名簿を手に入れていた。この名簿には、当時船員として共同船舶に勤務していた267名の氏名・職種・生年月日・住所・電話番号が記載されている。グリーンピース・ジャパンが特に注目したのは、この名簿に書かれている「職種」の欄だった。事前の情報によると、この職種欄にある「製造手」という職種が日新丸の甲板でクジラの解体作業にあたるベテランを意味し、この職に従事する船員が鯨肉の横領に関わる確率が高く、その規模も大きいということだった。この名簿には、「製造長」「製造次長」を含め「製造手」が39名記載されている。

今回、西濃運輸において確認できた名前と住所などをこの職員名簿と照合すると、送り主が確認できた23名中12名もが「製造手」と呼ばれる船員であることがわかった。さらに、その他の11名は名簿に名前がそもそもなかった。つまり今回、数年前の共同船舶の職員名簿と照合することで確認できた12名は全員が「製造手」ということになる。さらに、その名簿に「製造手」として掲載されている一人の船員がその名簿内で「製造長」「製造次長」「製造手」と記載されている3名にそれぞれ一箱ずつ送っていることも判明した。その3名は、情報提供者によるとすでに共同船舶株式会社を退職している可能性が高いが、3名は長くこの行為にかかわっていたという。伝票を確認しただけでははっきりと住所がわからなかった名前なども名簿と照合し、その結果、今回確認できた製造手12名によって発送された箱は最低47箱。それらはすべて北海道、青森県、長崎県、秋田県、宮城県、山口県に向けて送られていた。

船	氏名	職種	生年月日	〒	住所	電話番号	船員
あ	██████████	製造次長	22. 1. 22	██████████	北海道██████████	██████████	
	██████████	操機手	19. 1. 22	██████████	秋田県██████████	██████████	
	██████████	司厨員	26. 10. 13	██████████	大分県██████████	██████████	
	██████████	二航	46. 7. 21	██████████	徳島県██████████	██████████	
	██████████	甲板手	22. 3. 3	██████████	島根県██████████	██████████	
	██████████	製造員	25. 4. 27	██████████	宮城県██████████	██████████	
	██████████	甲板員	23. 2. 23	██████████	宮城県██████████	██████████	
	██████████	製造手	60. 9. 4	██████████	高知県██████████	██████████	
	██████████	製造員	37. 8. 13	██████████	青森県██████████	██████████	
	██████████	見通士	36. 9. 27	██████████	和歌山県██████████	██████████	
	██████████	甲板長	59. 9. 23	██████████	長崎県██████████	██████████	

グリーンピース・ジャパンが入手した共同船舶の職員名簿のページ
個人情報か特定できないように内容をランダムに並べ替えた

© Greenpeace

第6章 箱を追って青森へ

4月15日の夜、調査チームは箱を追って青森県へ向かった。



2008年4月16日 青森市内にある西濃運輸配送所へ
© Greenpeace

翌日、西濃運輸のウェブサイトにて伝票番号を打ち込み配達状況を確認すると、その日の朝のうちに青森県の西濃運輸配送所にそれらの荷物が届いている可能性が高いことがわかり、すぐに市内の配送所へと向かった。

この配送所において、品名がダンボールと書かれているにも関わらず、明らかに重い箱を発見。送り主も職員名簿に記載されている「製造手」の一人であることを確認できたため、この箱の中身を市内のホテルで確認することにした。



2008年4月16日 青森市内の西濃運輸配送所から箱を一つ確保
© Greenpeace



ホテルに持ち帰った箱はその前日に東京で確認した箱のひとつ
前日に東京で撮られた写真中の伝票が今回の青森で獲得した箱につけられていた伝票と一致
© Greenpeace

第7章 塩漬け鯨肉を発見、証拠を確保

この箱は、中身を確認した後に元に戻す予定で箱の底から開封した。箱を開封すると、入っていたのは、黒いビニール袋につつまれた畝須（うねす）の塩漬けで、上部を白い作業着で隠すようにして丁寧に梱包されていた。畝須とは、ヒゲクジラの下あごから腹にかけての縞模様の凹凸部分の肉で、クジラベーコンの材料となる需要の高い部位。赤肉などと比べ高額で取引される。これが10本、合計23.5キロ入っていた。

これらの肉は、日新丸の船上で鯨ベーコンの下ごしらえのために生の状態から直接数カ月間塩漬けし、熟成させたものと見られる。日新丸が調査副産物として販売に付す鯨肉はすべてそのまま冷凍されてしまうため、生の状態から直接塩漬け加工されたものは価値が高いことも予想される。市場では、ミンククジラのベーコンは1キロ2万円以上で販売されている。今回の畝須の実際の市場価値は不明だが、最終加工されていないことを考慮しても1キロ5千円から1万5千円程度の価値はあると予想され、23.5キロの箱では1箱11万円から35万円の価値がつくことになる。この箱を送った船員は同様の箱4箱を自宅に送っており、これらが同様の鯨肉を含むものだとしたら、44万円から140万円の価値のある鯨肉を自宅に日新丸から送ったことになる。



2008年4月16日 青森市内のホテルに持ち帰った箱と日付の確認のために並べられた当日の読売新聞

© Greenpeace



2008年4月16日 作業服で上部を隠すようにして梱包されていた箱の中身
下の黒いビニール袋の中に鯨肉が入っていた © Greenpeace



2008年4月16日 箱につけられていた伝票。品名には「ダンボール」とあり、
合計4箱送っていることが示されている © Greenpeace



2008年4月16日 箱に入っていた鯨肉の総重量は23.5キロ
© Greenpeace



2008年4月16日 出てきた鯨肉は軟須(うねす)と呼ばれる部位で、塩蔵されていたため表面がオレンジ色に変色していた
© Greenpeace



2008年4月16日 左上の軟須の黒くなった溝の部分には白い塩が詰まっているのが確認できる © Greenpeace

当初は、箱の中身を調べた後に、その箱を西濃運輸の配送所に戻す予定だったが、この箱の中身が重大な横領行為の証拠であると判断し、このダンボールを確保することに決めた。その後、市場での調査などを行なった上で、この箱を証拠として検察に提出し、共同船舶株式会社社員による横領として告発することにした。

第8章 市場での調査における証言

「当研究所が販売するミンククジラ及びナガスクジラ製品は、公的な性格を持った調査副産物であり、国民各層に対して公平に、且つ可能な限り廉価で配分する必要がある。その観点から、公正な販売を確保すべく、農林水産省総合食料局流通課に流通業者への指導を願うとともに、水産庁遠洋課の指導の下、当研究所も流通各社との販売に関する勉強会等を開催し、より幅広く国民各層に鯨肉が適正な価格で公平に行き渡るよう努めている」(財団法人日本鯨類研究所 平成19年5月31日プレスリリース『第20次南極海鯨類捕獲調査で得られた調査副産物の販売について』より)

4月15日に日新丸が東京港に入港する前後、グリーンピース・ジャパンでは函館、釧路、札幌、長崎、下関、広島、鹿児島、東京などの各地で鯨肉販売店やレストランを巡り、船員が横領しているという鯨肉についての情報を集めた。それらの情報は、明らかに正規のルートではないところで鯨肉が市場に出回っていることを示唆する。この章に関する会話は参考資料参照。

第9章 水産庁への問い合わせ

「水産庁の成子隆英・遠洋課長が15日記者会見し、調査捕鯨による鯨肉の販売価格の引き上げも検討する考えを明らかにした。終了した南極海での今季の調査捕鯨は、反捕鯨団体による妨害の影響で、捕獲頭数が551頭と目標の6割にとどまったためだ。」(2008年4月15日 朝日新聞社のウェブサイトの掲載記事より)

これらの調査結果を受けて、グリーンピース・ジャパンでは、2008年5月8日に水産庁遠洋課課長の成子隆英氏に電話で問い合わせを行った。この問い合わせの中で、船員が個人的に鯨肉を持ち帰ることがあるかとの問いに対して、成子課長はその可能性を明確に否定した。これにより、今回グリーンピース・ジャパンが確保したような鯨肉の私物化が、その流通を管轄し、かつ調査捕鯨の許可を出す水産庁も認めていない明確な横領行為であることが確実となった。以下はその会話内容の抜粋。

2008年5月8日 11時58分頃

調査員：6月に決定する(鯨肉販売)価格がありますよね。それが決まればすべての肉はその価格で販売されるという形になるわけですよね。

情報提供者：そうです。各部位ごとに細かい統一単価を決めますんで。すべてそれで卸売り市場に出ていくということになるわけです。

調査員：つまり、6月前には一切販売されないというわけですよね。

情報提供者：ええ、まだ価格も決まりませんので、販売しようがありませんので。

(中略)

調査員：例えばですね、昔、話に聞いたことがあったのですがけれど、商業捕鯨時代にですね、船員さんが(鯨肉を)お土産として持ち帰ることがあったみたいなお話をきいたことがあったのですがけれど、そういうことって今の調査捕鯨では基本的にないですよね。

情報提供者：ないです。極めて(流通が)限られていますから。

調査員：そうですね。いわゆる公的な鯨肉というかたちでやっているわけですよね。

情報提供者：そうです。

第10章 検察庁への告発、第三者による調査、そして信頼の回復を

日本が行う水産関連調査プロジェクトとしては最大規模で、過去20年間にわたり合計100億円以上の税金が費やされてきた調査捕鯨。その正当性と合法性を水産庁は繰り返し主張してきたが、今回、日新丸ではこのような鯨肉の横領行為が行なわれていたことが明らかになった。これだけの税金が費やされており、かつ世界中がその正当性に疑問を持ち批判の声をあげている事業である以上、この横領行為の早急な全貌解明と納税者そして国際社会への説明が求められる。

グリーンピース・ジャパンは、この横領行為の全貌解明のために東京地方検察庁に告発するとともに、以下の4つのことを日本政府に求める。

1. 横領行為の全貌を明らかにするための第三者による調査の実施とその情報開示
2. 共同船舶株式会社の捕鯨行為への関与の禁止
3. 財団法人日本鯨類研究所への調査捕鯨に対する許可発行の停止
4. 財団法人日本鯨類研究所への調査捕鯨に対する補助金交付の停止

上記のようにグリーンピース・ジャパンは、共同船舶株式会社の致死的調査への関与の禁止、そして財団法人日本鯨類研究所への補助金の停止などを求めていくが、同時にそれらの職員が今後その経験を活かすことができる環境を整えることも重要だと考える。

例えば、オーストラリアが提案するようなクジラを捕獲しない非致死的鯨類調査にその職員、そして船舶などを用い、今までに培った鯨類に関する知識や目視調査における鯨類の識別などの技術を活かすことが挙げられる。私たちの税金の使い道としても、横領行為が行なわれるような「調査捕鯨」ではなく、建設的かつ国際的にも認められている「調査保鯨」に使用することが納税者の理解につながる。この調査においては南極の鯨類だけでなく、その生態系やそこに地球温暖化が与える影響を調べることで、環境先進国を謳う日本として相応しい責任を全うすることができ、捕鯨問題で失われつつあった信頼を回復することができるだろう。

参考資料

情報提供者とのインタビュー録

第2章の参考資料

(調査員を「調」、情報提供者を「情」と表記)

5月11日

調: まず最初にお話できるところまで結構なんですけれども、今回証言くださる内容をなぜご存知なのかということと、今回なぜ証言して下さったのかという理由をお聞かせください。

情: 私、実際、共同船舶の方で、南極海で捕鯨の方に、調査の方に乗ってましたので。なぜ言おうと思ったのかというと、調査という名の下で結構な量のクジラの肉を捨てたという事実があるんでね。これはちょっと調査じゃないんじゃないかという、ちょっと疑問を持ちましてね、これは良くないということで、感じて話したくなったということなんですけども。

調: クジラの肉を捨てていたというのは、具体的にはどのような形で行なわれたのでしょうか？

情: グリーンピースやらシーシェパードの妨害活動で捕れない時期があったので、急遽、急いで捕らなきゃならないという状況になって、一日にミンクで20頭以上捕ることが多かったんですよ。そのときにはほとんど、20頭以上あがったときにはときにはほとんど、雑肉ですかね、コギレとかムナサンとかいう雑肉はもう手が回らないんで、次の日までそのままあるんですよ。朝7時になったら次の新しいクジラがあがってくるんですから。その次は捌ききれなくて処理しきれなくて全部捨てちゃうんですよ。約ミンク一頭から350キロくらいの雑肉がありますから、20頭で、単純計算で7トンくらいは捨ててるという感じですね。

調: それはほぼ毎日のように7トンくらいの肉が捨てられてるということですか？

情: そうですね。20頭以上あがった時には間違いなく捨てますね。

調: これは具体的には誰の指示で行うことになりますか？

情: 私らには誰からの指示というのははっきりわからないですけども、製造の甲板の責任者の方に上のほうから指示がきてると思います。勝手に捨てることはないですから。それが船団長なのか船長なのかは、そこまではちょっとわかりませんが。

調: 具体的には捨て方としてはどのように捨ててるんですか？

情: 一応、雑肉というのはマスを取りしてるんですよ。サイドにある挿し板を剥いたら、そのまま船外に出るという感じですね。

調: 何も処理せずに、そのまま捨ててしまうということですか？

情: そうですね。手を付けられないんでね。もう処理するのが間に合わないんで、捨てるという感じですね。

調: それを見ていた船員さんたちは、どういう風に具体的に思われていたのでしょうか？

情: 何人かは捨てるぐらいなら捕るなという話はしてましたけれども、それを上に訴えるわけじゃないですけどね。内輪だけではね。捨てるぐらいなら捕るなよ、という話はしてましたね。

調: やっぱり捕った方としてもそれが捨てられるというのは(嫌ですよ)？

情: それは嫌ですよ。ずっとクジラに携わってきた人にしてみたら嫌なことですよ。

調: もうかなり無駄にしているという感じですか？

情: もう調査捕鯨でなく、商業捕鯨みたいな感じですね。

調: 必要な部分だけを捕って残りは捨てるというのですか？

情: そうですね。手が回らないところは捨てよう、という感じでやってみました。

調: それ以外に、乗ってらっしゃってこれは科学調査ではないなあという風に思ったことってというのは他にありませんか？

情: 調査自体はかなり綿密にやってますけどね。個体個体でね、それはきっちりやってますけどね。

調: あるところでは、ランダムに捕るといってところでちょっと違うという話を聞いたことがあるのですが。そこはいかがですか？

情: 捕れるときは捕っておこう、っていう感じですね。捕れなくなったらほとんど、海が荒れた時とかは捕れないんで。捕れる時はいくらでも捕ろう、という感じですね。

調: そうすると具体的に、ランダムに捕っている、という感覚ではなくて、いるところに、いるときに捕る、という感じですか？

情: そうですね。

調: それ以外に船員が何か悪いことをしているということをご存知でしょうか？

情: これはもう、多分、伝統的なものだと思いますけど、乗組員のほとんどがクジラ肉、ベーコンの畝須なんか、全部勝手に自分で塩漬けて持ち帰っています。もうこれは相当な量、みんな持っていています。全員ではないですけども。若い人はそんなに興味ないけども。ある程度歳いった人は皆、持ち帰ってます。

調: 具体的には、歳いった人っていうのはどういう職種につかれていますか？

情: ほとんど製造、製造の人ですね。製造の人がもうほとんど。

調: 具体的にどれくらいの方って思われますでしょうか？

情: 日新丸でしたら150人乗ってたら、ほぼ120、130人の規模で皆さんが200キロ300キロのクジラ肉やらベーコンやらを持ち帰ってますね。生産の頭数にはない肉ですよ。

調: つまり、公式に発表されるクジラのトン数とはまた別のものですか？

情: 以外、それ以外ですね。これはずっともう昔からやってるみたいですよ。

調：これは皆さんが知っているというような状況ですか？

情：そうですね。それぞれが皆知ってますけども、公には言わないですけどね。それぞれが暗黙の了解でやってます。共同船舶の社員もいますけども、見てみないふりしてるみたいなのです。

調：例えば他に、日新丸には共同船舶だけではなくて、例えば鯨類研究所の人も乗ってますよね？

情：はい。多分、知ってはいますけども、もう、まともに言うことはないですね。ある程度皆さんも、まともに、こう、目の前で盗むようなことはしないんで。皆、それぞれ隠してやってるんで。でも分かっていることは分かっていますよね。でも、あえてそれを追及するようなことはしてませんね。

調：具体的に、「隠すように」というのはどういう風にやってるんですか？

情：例えば、畝須だったらベーコンにするんで、各部屋で塩漬けをして保存してますね。あと、肉、赤肉やらオノミなんかは冷凍保存してます。皆さんそれぞれの、冷倉っていうんですけども、そこに保存する場所があります。

調：それは具体的に不正でとったものを保存するというものですか？

情：そうです。はい。

調：そこに皆さんどういう風な形で置いておくんですか？

情：もう、箱詰め。冷凍品はもう箱詰め、みんな箱詰めです。

調：それはもう、暗黙の了解でそこはそういうものを置くのですか？

情：そうですね。あるの分かってて、もう責任者も誰も言わないし。共同船舶の社員さんも誰も言わないし。鯨研の人はそこに入ることはほとんどないですけどね。

調：例えば一番多く持ち帰る人で、どれくらいの量を持ち帰るとか分かりますか？

情：そうですね。宅急便の一番大きなケースでだいたい40キロくらい入りますんで、それで20箱くらい持ってく人もいます。800キロですね。多い人でそれくらい。

調：少ない人でいうと？

情：5、6箱くらいは持っていきますね。

調：例えば、それにはナガスクジラだとかそういうクジラも含まれますか？

情：そうですね。私が乗ってた時はナガス捕ってたんで、ナガスは完璧、ナガスの赤肉やら畝須が含まれてますよね。ま、全体じゃないですけどね。それはほとんど上の幹部、上の人たちが引っ張り込んでると思います。

調：実際に隠れて持って帰る鯨肉というのは高級なものが多いんですか？

情：高級品ですね。全部。

調：安いものは盗らずに、ということですか？

情：はい。8割方、畝須ですね。ベーコンの原料ですね。

調：それ以外にもあるんですか？

情：赤肉も、油ののった赤肉、あとオノミですね。

調：具体的に、隠して持って帰ってくるというのは、理由なども何もなくてただ隠れて持ち込むって形ですか？

情：家でただ食べるだけだったらそんな量いらないですよ。だから、あの、それぞれが、10年、20年乗ってる人はもう地元とか、その辺の市場に売りさばいてるって感じですね。

調：それは具体的にはどういう風な形で、証拠というんですかね、売りさばいてるって聞いたことがあるとかって、そういうことはありますか？

情：それは、乗組員の人に聞きました。ベーコンだけで家を建てるくらい売ったよって人もいましたし。

調：そうですか。その方はかなり長年にわたってやってらっしゃる？

情：そうですね。もう、ずっとやってるみたいですね。

調：そういう方はいわゆる、その製造に携わっている方ですか？

情：そう、みんな製造です。

調：その盗ってくる方々っていうのは製造の方で、具体的に、今思いつく名前っていうのはありますか？

情：私が乗ってた頃は…。名前ですか？ 個人的な名前ですか？ 今はもう定年で辞めたと思いますけども、〇〇出身の〇〇さんっていう人なんかは相当な量持ってってましたね。

調：その相当な量っていうのは、先ほどおっしゃっていた20箱とか？

情：そうですね。そのくらいの規模で、はい。

調：先ほど、日本鯨類研究所の方もある程度は知っているというお話でしたが、どの程度まで皆さん知ってらっしゃると思いますか？

情：現行犯で見てるわけじゃないんで、やってるな、というのは分かっていますけども、ほとんど言わないですね。

調：日新丸の船長はどうでしょう？ 知っていると思いますか？

情：たぶん知っていますよ。それは、はい。ただ言わないだけです。言葉に出して言わないだけで、持って帰るのは分かっていますね。

調：例えば、日新丸以外にも、捕鯨船団というのは船がありますけども、その方々へはクジラの肉というのはいくのですか？

情：ある程度は母船、日新丸の方の幹部からは流れてると思います。

調：では、そのあたりで分け前があるという？

情：そんな母船ほどの量じゃないですけどね。あと、今は辞めたOBの人にも現役の方から1箱とか2箱とか送られてますよね。毎回、全部ごまかした肉やら敵須ですね。

調：先ほどその、個人で持ち帰られるっていう肉があるっておっしゃいましたが、その中に「お土産」もあるということを知ったことがあるんですけども。

情：はい。あの、船側である程度お土産はくれますね。それは、赤肉1キロブロックが6個くらい、あと敵須の塩漬けが5キロくらいですね。それはお土産でくれますね。あと、個人で買うものもあります。だいたい1人最低4キロ、1キロブロック4個くらいは買いますね。

調：それは、具体的に買うというのはどういう風に？ 現金で払って買う？

情：いえ。給料引きですね。

調：後々、給料から…ですか？

情：そうですね。給料から引かれます。

調：それらはどのようにして個人宅に配達されるのでしょうか？

情：そのお土産品ですか？

調：はい。

情：冷凍品はみんな宅急便ですね。

調：クール宅急便？

情：クール宅急便ですね。冷凍品は。

調：それと、お土産で出るものと、いわゆる強制的に買わされるようなものっていう以外のものがあるのですか？

情：強制じゃないですけども、やっぱり空気のには買わざるを得ないような空気ですよ。

調：なるほど。そうするとほとんどの方が買われるのですか？

情：そうですね。ほとんど100%に近いくらいが買うという。

調：先ほどの、船室に持ち込んでるという肉はそれ以外のものですか？

情：そうですね。自分の部屋の分はほとんど敵須なんで、全部塩蔵ですね。塩漬け。

調：つまり、船室で作るといのは前もって船員さんたちは分かっている、塩だとかを持ち込んでいるのですか？

情：そうですね。塩と段ボールは必ず出港時、山ほど積んでますね。

調：具体的に、誰がそれを手配するんですか？

情：個人個人でやってますね、皆。

調：乗る前に、段ボールと塩を？

情：そうですね。はい。日新丸の基地である広島県の因島ですよ、あの町で段ボールがなくなりますから。塩と段ボールが売り切れますから。日新丸の乗組員が買うだけで。

調：みんなほとんど買い占めて？

情：そうですね。みんな買い占めみたいな感じですね。

調：具体的に、その塩漬けされたクジラの肉というのは、日新丸が入港した後にどのようにして運ばれるんでしょう？

情：入港したら、一番で西濃運輸さんが来るんで。それは、船側が、会社側が頼んでますんで、それで一番に荷揚げされます。それは全部塩漬けした、ほとんどが敵須、あと個人のちょっとした衣類もありますけど。ほとんど敵須ですね。塩漬けされた敵須ですね。

調：それは入港した初日にやるっていうのが…

情：恒例になっていますね。入港前に皆、何箱あるか数を船側で数をとりますからね。段ボール何個あるかというのを。で、伝票渡しますの。

調：つまり、個人の荷物として送られるものに、急に船に乗った時とは関係ないものが30箱増えるということですか？

情：そうですね。普通であれば出航して入港までには物は減るわけですけども、逆に増えてたわけですから、それも共同船舶も暗黙の了解。何の疑問も持たない。注意もしない。そういうことですよ。

調：そうすると、共同船舶が契約をしているということは、ある程度やはり分かっているなという感じですか？

情：分かっていますね。

調：荷下ろしをする際というのは、具体的にはどういう風に荷下ろしされるんですか？

情：入港前にハッチ口っていうんですけども、そこにあらかじめ、荷揚げするのはモッコっていうんですけども、それで積んであります。入港して西濃運輸が来たらすぐに揚げれる。それで乗組員全員で荷揚げします。

調：これっていうのは、具体的にはどれくらいの時間をかけて荷下ろししたりするんですか？

情：そんなに時間かからないですね。小一時間もあれば充分。

調：2006年の西濃運輸としてはどれくらいの量が出たと思いますか？

情：たぶん、トン数でいったら8トンくらいじゃないですか。

調：トラックとしては何台くらい？

情：1台でほぼ収まったと思いますけども。

調：もうかなり満タンになるくらい？

情：そうですね。満タンですね。

調：先ほどの科学調査というところなんですけども、具体的に科学調査でサンプルが採られますよね、船上で？

情：はい。

調: それに関して、どのように船上で科学調査がされてるのかっていうことですね。以前に、私聞いたのですが、調査サンプル数があまりにも多すぎて追いつかない、という話を聞いたことがあるのですが、それは事実でしょうか？

情: ああ、その内部までは分からないですけども、鯨研の人の話ではサンプル品が、もう山ほど陸上に余っているっていう話は聞きました。

調: つまり、捕っている量がかなり多いので(余っているということですか)？

情: 多いのでサンプル処理しきれないという、調査しきれないという、さばききれないという、余っているという話でしたよ。

調: 最近、以前に比べて捕れているクジラの肉の量が一頭あたり減ってきているというような、ことがわかってはいるんですけども。それっていうのは、最初にお話されていたクジラの肉を捨てているところからきていると思われませんか？

情: まとめて捕るようになったら、さっき言ったみたいに、日に20頭以上あげれなくなると、処理できないんで、捨てることは間違いないですね。

調: 最近、日新丸船上で火災ですとか、事故ですとかっていうのが結構頻繁に起きてますけども、労働状況というのはどうなのでしょう？

情: 労働状況は結構厳しいんですけども、あと、休暇、仕事が終わってからは結構甘いんで、部屋で飲食する、部屋で火災予防のためにヒーターとか使用禁止になってます。その辺は厳しいですね。火の元には厳しいです。ただ、飲酒に関してはあまり厳しくないですね。もう、自由に何時間でも飲んでるっていう感じ。酔っぱらって次の日仕事してるっていう人が結構いますよ。

調: かなり辞められる方も多いいっていう話を聞くんですけども、その辺りはどうですか？

情: ああ、若い人は結構辞めますね。魅力がないというか。歳いった人はそれなりに盗んだクジラ肉で良い思いしてるんで、辞めることもないし。だけどやっぱり若い人は朝から晩まで怒鳴られっぱなしなんで。どこも入港するわけじゃないし、魅力のない仕事だっっていうことで辞める人が多いですね。

調: 最後にですね、写真をちょっと見ていただいて、これがいわゆる塩漬けの畝須が入ってそうな箱かどうかっていうのを確認してもらいたいんですけど？(グリーンピース・ジャパンが撮影した箱の写真を見せて)

情: ああ、間違いないですね。はい。これは畝須が入ってますね。

調: そうですか。

情: はい。

調: それはどのようにしてわかりますか？

情: 西濃運輸に出された宅急便が今ほとんど畝須の塩漬けです。生だと腐るんで。はっきりわかりますね。全部塩漬けです。畝須の塩漬けです。

調: 畝須の塩漬けっていうのは、そういうような形ではっきりわかるのですか？

情: はい、全部西濃運輸であげるのは間違いなく、そうですね。間違いないです。だいたい、段ボールがでかいですからね。小さい段ボールは使わないんで、はっきりしてますね。

調: こういうような形をしてる西濃運輸で送られてるものに関してはどう間違いない？

情: 畝須の塩漬けですね。

調: 船に乗っていたこととは変わるんですけども、今、オーストラリアだとかニュージーランドっていう、かなり強く日本の捕鯨について反対していますけども、それについて、乗っていた人の立場からどういう風に思われますか？

情: もともと私も日新丸に乗ってたんで、調査で捕る分にはそんな騒ぐほどじゃないと思うんですけど、私が乗っていたときには非常にひどい捨て方をしてたものだからね。あとクジラの病気ですね。これが意外と結構多くて、ガンなんか結構発見されるんですよ。例えば肝臓ガンとかのクジラも。でも、肉やらはそのまま処理して一般に売られるわけですよ。これも大問題だと思いませんよ。

調: それは、具体的にもう見て明らかにガンだって分かる？

情: それはもう鯨研の人が必ず写真撮るんで、それは証拠もあるし、サンプルも採ってると思います。

調: ただ、それは同じように肉は普通に売られるわけですか？

情: その部分だけは捨てますけども。ただ肝臓だけがガンで、肝臓だけ捨てて他の肉は取ったら、元ですからね、怖いですよね。たぶん、鯨研さんはいっさい発表してないと思いますけども。その病気に関しては。

調: それはかなり頻繁に見られるものなのですか？

情: 頻繁に見ますね。ほぼ毎日のように病気のクジラは。胃潰瘍だったり、あとガン細胞は結構多いですよ。

調: それは昔から乗ってる方はどういう風におっしゃってましたか？昔はなかったとか？

情: いや、もうほとんど昔からあったんですね。

調: 最後に、このようにして乗ってらっしゃったわけですけども、今、共同船舶の方とかですね、鯨類研究所の方に言いたいことっていうのは何かありますでしょうか？

情: 私が言いたいのは、まあ、捨てるくらいなら捕るなど。その一言ですね。捨てるくらいなら捕るな、ということですね。無理に捕って、船員にも無理をかけて、ただ疲れるだけで、その上肉を捨てるわけですから。

調: かなり無駄な作業をしたというか？

情: 無駄な作業、という感じですね。

調: わかりました。ありがとうございました。

第8章の参考資料①

(調査員を「調」、情報提供者を「情」と記す)

ケース1: 4月24日、26日 共同船舶株式会社に塩を納品しているという業者の話



2008年4月26日 広島県で共同船舶に食品や塩などを納入している業者の女性

© Greenpeace

2008年4月24日

調: 何かあるんですか、特別に、例えば味わって美味しい塩とか、魚とかに塗って保存するのにいいお塩とか。種類があるんですか？

情: いや、それはないねー。あの一、クジラなんかでも普通の塩が行っているからね。

調: クジラ？

情: うん。クジラなんかでもね。

調: へー、塩で保存するんですか？

情: そうそう、皮なんかをね。塩で保存したりするのは、うちから行っているような塩で。

調: あーそうなんですか。

情: うん、粗塩みたいな。粗塩じゃないと保存できないけんね。

調: 粗塩じゃないと保存できないんですか？

情: 塩がよく効かないよ、あの、精選したものが効かないけんね。

調: この辺ってそういうクジラの文化の町なんですね。

情: (日新丸が)ドックにね、入るけんね。ユニバーサル造船に。

調: そうなんですか。長い間こちらがお塩を？

情: ええ、船食はもう長い間している。その、仕事はね。

2008年4月26日

調: 旦那様に一昨日ですかね、ご紹介いただいたお寿司屋さんで、今年の肉を、クジラの肉をいただけることになったので、ありがとうございますと言いたくて来ました。

情: でも、お寿司はまだ本船が入っていないからダメじゃろう。

調: あ、そうなんですか？

情: うん。

調: いい、みたいなことを電話では言ってたので。

情: いやいや、それは入ってからよ。それは29日に入るから、それからまあ、そのお寿司屋さんやそこら辺の食堂の人が買ってからね。

調: あ、船から買うんですか？

情: いや、船からじゃなくて、どういう風なルートで入るか私は知らないけど。

調: やっぱり冷凍や塩漬けもあるんですね、クジラの肉って。

情: そうそう。

調: その塩を共同船舶さんに売られているということ？

情: ウン。

第8章の参考資料②

(調査員を「調」、情報提供者を「情」と記す)

ケース2: 4月24日 共同船舶株式会社に塩を納品しているという業者の話



2008年4月24日 広島県で共同船舶に食品や塩などを納入している業者の男性 © Greenpeace

2008年4月24日

(紹介された寿司屋を訪ねた後で)

情: (鯨肉)ありました?

調: いや、お客さんいっぱいいたんで聞きづらくて。なんか聞きづらいものなんですか、そういうのって?

情: いや、別に、ないと思いますけどね。

調: あの、メニューに書いていなかったんで。

情: ああ、書いていない。

調: 知る人ぞ知る?

情: (うなずく)

調: 何か名前ってあるんですか?

情: いやいや、ないと思いますよ。

調: 「今年のクジラください」みたいな感じでいいんですかね?

情: まだない。

調: まだないですか?

情: まだない。

調: 29日以降?

情: だったら入ってくるけどね。どのようにするかはわからない。

調: そうですね。毎年そんな感じ? 船が入ってきたら……

情: ある人はある。色々あるみたいですよ。

第8章の参考資料③

(調査員を「調」、情報提供者を「情」と記す)

ケース3: 4月24日、26日 ケース2の男性に紹介された 広島県内の寿司屋の話



2008年4月26日 広島県内の寿司屋の男性
© Greenpeace

2008年4月24日

調: 今日は〇〇さんに紹介していただいて来たんですけど。

情: はあはあ。

調: クジラが食べたいなと思って。

情: はあはあ。

調: 今年の新しいのってあるんですか?

情: ん?

調: 今年の新しいのってあるんですか?

情: …あるにはあるが、まだ封を切っていない。

調: 今年のっていつ開けるんですか?

情: はい?

調: いつ今年のとって開けるんですか?

情: 忙しくてね、ははは。

調: 今仕込み中みたいな感じ?

情: そうそう。

調: 今月いっぱい広島にいるんですけど、間に合いますか?

情: ああ、そりゃもう。

調: 間に合う?

情: (「はい」のしぐさ)

調: じゃあ、また月末あたりに来ます。

2008年4月26日

調: 今日お願いしているそのお肉は南氷洋の肉なんですか? 今年帰ってきたばかりのものなんですか?

情: (うなずく)

調: 結構貴重なものなんですか、これ? 特別ルートっていう感じなんですか? 南氷洋の新しいお肉、いただきます。どこの部分なんですか?

情: それは秘密。なかなか。刺身で一番いいのは尾のみ言うて、一番こう力を使うところなんだけど、なかなかそういうのはね、それこそあんたあの、永田町とかでないとならない。

調: 船員さんも、その、(鯨肉を)賄いのおばちゃんとかに?

情: それもあるけど、自分ら用にとってあるんよ。

調: あ、自分ら用に船員さんたちがこっそりとですか?

情: そうそう。長いことおる人は■■■(聞き取れず)やしの、入ってすぐの人は赤身とか、年功序列があって。

調： そうなんですか。

情： 割り当てがある。

調： へー、普通の人には知らないことですよ。

情： そりゃやっぱり、ええとこはやっぱり、何でもそうじゃけど、ねえ、漁師料理ってのがある。

情： 美味しいところは、市場には出んわな。解体してこうして、美味しいところは自分たちで選って、ね。

調： もしかして、今いただいているのもそういうルートなんですか？

情： いやいや、それはまたね、そうやって(別で)入るんだけど。

調： それとはまた別ルートで、今年の肉が手に入るルートがあるんですか？

情： (うなずく)

調： 相当凄いですね、やっぱり高価なものなんですか？

情： (うなずく)

そりゃのう、少々金を出せばのう、手に入るんだけど。

調： どれくらい入ってくるものなんですか、こういうのって？
どれくらいの量？

情： …冷凍の卸でね、ブロックでこれくらいのが。たまに九州から電話で「クジラいりまへんか」と話が来るときもある。

調： でもそれ、その今年の……。今ってホントはまだ出てないんですよ？

情： 今ついたやつ(鯨肉)はまだどこも流れていない。

GREENPEACE

私たちグリーンピースは、「グリーン(持続可能)」で「ピース(平和)」な社会を実現するために活動する国際環境NGO(非政府組織)です。

豊かな生命を育んできた地球をも守るために、生物多様性の保護、海・大地・大気・淡水の汚染や乱用の防止、あらゆる核の脅威の終結、そして、世界的な平和と軍縮をめざしています。

一人ひとりの小さなエネルギーが、やがて未来を包む大きな希望となるのです。

特定非営利活動法人 グリーンピース・ジャパン

〒160-0023
東京都新宿区西新宿8-13-11 NFビル2F
TEL: 03-5338-9800
FAX: 03-5338-9817
<http://www.greenpeace.or.jp>



2008年4月15日 東京港に入港した日新丸の前で
© Greenpeace